

アリ軍／書名	著者（発行年）	出版社	推薦者コメント／（工）工藤起来、（五）五箇公一、（坂）坂本洋典、（山）山口進、（無印）吉澤樹理
The ANTS	Bert Hölldobler, Edward O. Wilson (1990)	Belknap Press	細密な図と分かりやすい説明の大作
蟻の自然誌	パート・ヘルドブラー、エドワード・ウィルソン(1997)	朝日新聞社刊	The ANTSの日本語版。アリの生態はこれ一冊で
アリ・ハチのなかま	海野和男 (2010)	新日本出版社	なんと言っても写真がキレイ。そして、生態の紹介も分かりやすい(工)
アリたちとの大冒険ー愛しのスーパーアリを追い求めて	マーク・W・モフェット (2013)	化学同人	美しい写真からアリの世界に引き込まれる作品
アリの生態ふしぎ見聞録	久保田政雄 (2008)	技術評論社	アリのおもしろい生態が分かりやすく解説
アリとくらすむし	島田たく (2015)	ポプラ社	子供向けで分かりやすい好雌性昆虫の世界、入門書としてもですが専門家も楽しめる内容かと(坂)
ありとすいか	たむらしげる (2002)	ポプラ社	絵が自然で気持ちがいい(山)
アリのくらしに大接近	丸山宗利 (2015)	あかね出版	アリの写真科学絵本。詳しい解説もあり
アリの巣の生きもの図鑑	丸山宗利、工藤誠也、島田拓 (2013)	東海大学出版会	アリと暮らす好雌性昆虫の世界を美しい写真と共に解説
アリの巣をめぐる冒険	丸山宗利 (2012)	東海大学出版部	採集やそのエピソードとともに、好雌性昆虫の魅力が満載!
アリの生態と分類	山根正気 (2010)	南方新社	関西以内に生息するアリを中心に紹介したアリ図鑑
アリの社会：小さな虫の大きな知恵	坂本洋典、東正剛、村上貴弘 (2015)	東海大学出版会	アリ研究者 10 人によるそれぞれの最新研究とアリの社会の紹介に、アリの飼育法、写真法まで内容たっぷりの本。研究者への入門書(坂)
アリはなぜ一列に歩くのか	山岡亮平 (1995)	大修館書店	少し古い本ですが、化学生態学についての知見を分かりやすく紹介しています(工)
アリハンドブック 増補改訂版	寺山守 (2018)	文一総合出版	野外で持ち歩くアリ図鑑といえば、これだ!
アルゼンチアリ：史上最強の侵略的外来種	田付貞洋 (2014)	東京大学出版会	アルゼンチンアリの生態を詳しく説明した最新刊
外来アリのはなし	橋本佳明 (2020)	朝倉書店	外来アリに焦点を絞った一冊、そこから不思議なアリの社会にのめりこむきっかけになるかも(坂)
クルマの渋滞アリの 行列渋滞学が教える「混雑」の真相	西成活裕 (2007)	技術評論社	なぜ渋滞が起きるのか?を分かりやすく解説した一冊
昆虫はすごい	丸山宗利 (2014)	光文社	昆虫のおもしろい生態にあなたもびっくり!?
昆虫はこわい	丸山宗利 (2017)	幻冬舎	昆虫採集で起きる苦労と成果の冒険記
世界でいちばん変な虫：珍虫奇虫図鑑	海野和男 (2020)	草思社	世界のおもしろい形の昆虫の写真集。その驚きの形について見つけてしまいます
ぜんぶわかる!アリ	島田拓 (2019)	ポプラ社	クロオオアリの生活史を写真と分かりやすい説明で解説
日本産アリ類図鑑	寺山守、久保田敏、江口克之 (2014)	朝倉書店	詳しいアリの分類が分かる図鑑。本格的に種類を調べたい人は必見!
博士の愛したジミな昆虫	金子修治ほか監修 (2020)	岩波ジュニア新書	研究者が語る熱い昆虫の話! ?研究者の虫愛を感じずにはられません!
働かないアリに意義がある	長谷川英祐 (2016)	KADOKAWA	アリの社会には必ず 2 割程度の「働かないアリ」がいます。ダーウィンの進化論からすれば、全員が働いて餌をとる能力が高い巣の方が「勝者」となって進化するように思えるのですが、実際の環境は常に変動しており、不測の事態に備えて、(現時点で無駄に見える)「予備軍」を生かしておくことで、突発的な難局を乗り越えて巣を「持続」させることができます。つまり「最適化」は単なる一時的な効率ではなく、長く世代を繋いでいく持続性も重要な進化パラメータであることを教えてくれる、という本です。人間社会もこれからポストコロナを迎えるにあたり、これまでの瞬間的な生産性第一主義から、持続的な生活へとシフトしていかなくてはなりません。アリから学ぶことはたくさんありそうです。(五)
蜂と蟻に刺されてみたー痛さからわかった毒針昆虫のヒミツ	ジャスティン・シュミット (2018)	白揚社	ハチとアリに刺された時の痛さを数値化?したおもしろい体験記
身近なアリけんさくブック	吉澤樹理 (2019)	仮説社	はじめてアリを調べるためのアリ図鑑。インデックスつきだから簡単に調べられます!
ありとあらゆるアリの話	久保田政雄 (1988)	講談社	アリのあんなこと、こんなこと、全て揃ったありのお話
ハキリアリ 農業を営む奇跡の生物	パート・ヘルドブラー、エドワード・ウィルソン(2012)	飛鳥新社	キノコを栽培しているアリ、ハキリアリ。人間らしいその姿に魅了されるかも・・・
アリの世界	栗林慧 (2005)	あかね書房	アリの生活史を図や写真で説明された児童書
アリの行列	寺山守 (2014)	金の星社	行列を作るアリから身近にいるアリまでを写真や説明で詳しく解説
働かないアリに意義がある! (コミックエッセイ)	いずみりょう(漫画)、長谷川英祐(原作) (2012)	KADOKAWA	コミック版「働かないアリに意義がある」は、笑いあり、涙あり?で分かりやすく解説
働くアリに幸せを 持続と滅びの組織論	長谷川英祐 (2013)	講談社	アリの社会から学ぶ組織とは?アリの生態からヒントがもらえるかも…
アリのたんけん	栗林慧 (2016)	小学館	アリの目から見た、様々な生き物を紹介!アリってこんな世界を見ているの?
アリとくらすむし	島田たく (2016)	ポプラ社	アリのとともに生活する虫。アリ目線で撮影されたその写真は、感動!
地面の下のいきもの	大野正男、松岡達英 (1988)	副音館書店	アリの巣ってどうなっているの?絵本からみるアリの世界に目が釘付け
ハチとアリの自然史	杉浦直人、阿部芳久、市野隆雄 (2002)	北海道大学出版会	アリの行動から生態まで最先端のアリの研究が分かります
ヒアリの生物学ー行動生態と分子基盤ー	東正剛、緒方一夫、S.D. ポーター (2008)	海游社	ヒアリについてのバイブル。写真付きで分かりやすく解説されています
アリの巣のお客さん	丸山宗利 (2015)	あかね書房	アリと生活するさまざまな生き物を紹介。生き物の迫力ある写真が魅力的
モリのいる場所	小林雄次 (2018)	朝日新聞出版	「蟻は左足の 2 本目から歩き出す」ことを発見! 30 年間家の庭から出なかった画家熊谷守一の人生の一日を映画化
僕らは奇跡でできている 上・下	木俣冬 (2018)	扶桑社	動物行動学を教える純真無垢な大学講師と、学生や同僚との間で起こるコミカル・ハートフルドラマ!



8hebo



Office Trente-sept

伊那の幸

塚原信州珍味

〒396-0012 長野県伊那市上新田2570-1
TEL・FAX 0265-76-0591
info@tsukahara-chinmi.com

つけち

東京付知会

恵那市 串原

とる

そだてる

たべる

へボミュージアム

(問) 串原マレットハウス 0573-52-2960



8hebo



Office Trente-sept

伊那の幸

塚原信州珍味

〒396-0012 長野県伊那市上新田2570-1

TEL・FAX 0265-76-0591

info@tsukahara-chinmi.com



つけち

飲食店情報

東京付知会

恵那市 串原

とる

そだてる

たべる

へぼ

ミュージアム

(問) 串原マレットハウス 0573-52-2960

ハチ軍／書名	著者（発行年）	出版社	推薦者コメント／（井）井上治彦、（い）井上真紀、（工）工藤起来、（後）後北峰之、（佐）佐山勝彦、（坂）坂本昇、（土）土田浩治、（牧）牧野俊一、（松）松本史樹郎、（溝）溝田浩二、（光）光畑雅宏
ハチとアリの自然史－本能の進化学	杉浦直人、伊藤文紀、前田泰生 編 (2002)	北海道大学図書刊行会	研究の視点やアプローチの多様性とともに、研究の難しさや楽しさが伝わる 1 冊(佐) 生活史、行動、繁殖戦略、社会システム、生物地理と分化、アリと植物の共生など、様々な自然史的視点の専門書だが分かりやすい(山)
ハチの家族と社会－カースト社会の母と娘	坂上昭一 (1992)	中央公論社(中公新書)	ホクダイコハナバチの生活史や社会構造から描く社会進化のドラマ(佐)
ハチの生活	岩田久二雄 (1974)	岩波書店	「日本のファール」がやさしく語る、ハチの多彩な暮らしぶり(牧)
ハチの博物誌	杉山恵一 (1989)	青土社	著者の「非常に好きな蜂」への偏愛に満ちた観察記(牧)
社会性ハチの不思議な社会	松浦誠 (1988)	どうぶつ社	今は無き名雑誌「インセクトリウム」連載記事の合本版。数多くの未発表データを残しつつ逝った著者の膨大な知識の一端をうかがえる(牧)
社会性昆虫の進化生態学	松本忠夫、東正剛 共編 (1993)	海游舎	ハチ関係は第 2 章(アシナガバチ)、第 6 章(ミツバチ) (佐)
社会性昆虫の進化生物学	東正剛、辻和希 共編 (2011)	海游舎	社会性昆虫の進化生態学が網羅的に記述され、基礎を押さえるには良い専門書。私もマニアックな内容を記述(土)
日本の真社会性ハチ：全種・全亜種生態図鑑	高見澤今朝雄 (2005)	信濃毎日新聞社	掲載全種の豊富な生態写真が圧巻。しかも簡潔かつ詳しい解説でとても分かりやすい(坂)
南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説	山根正気、幾留秀一、寺山守 (1999)	北海道大学図書刊行会	南西諸島に分布する有剣類(アリ類を含む)を掲載。検索表によって、全ての種を同定可能(山)／本州にも分布するハチも多く載っているため南西諸島でなくとも実用的(坂)
日本昆虫記 1：ハチの生活	岩田久二雄、古川晴男、安松京三 編 (1959)	講談社	幼少期に読んだ昆虫学者も多いに違いない。ハチ観察の面白さを生き生きと伝える名著(牧)
熱帯のハチー多女王制のなぞを探る	伊藤嘉昭 (1996)	海游舎	著者の熱帯・亜熱帯での調査経験を交えたアシナガバチ類の社会探訪私記(佐)
蜂アカデミーへの報告	後藤明生 (1986)	新潮社	スズメバチに刺された小説家による、スズメバチの記録と考察(佐)
蜂は職人・デザイナー	奥本大三郎ほか (1998)	INAX 出版	INAX ギャラリーで行われた展覧会の解説書。蜂の巣の美しさで機能性に迫る(坂)
昆虫の社会生活	ウィリアム・M. ホイラー (1986)	紀伊国屋書店	1923 年に昆虫の社会進化についての仮説を初めて提示。最近の昆虫社会の進化に関する成果の解説もつけ加えられた貴重書(山)
ずかん ハチ	Coco(イラスト写真)、松本史樹郎(監修) (2014)	技術評論社	やさしい解説とイラストで入門書として最適。飛翔中のハチの写真がすばらしい(松)
あっ!ハチがいる!	千葉県立中央博物館 編 (2004)	千葉県立中央博物館	いろんなハチについて知ることができる(い)
ハチの観察と飼育	松浦誠 (1985)	ニュー・サイエンス社	カリバチやハナバチの観察を始める際の入門書として最適(佐)
ハチハンドブック	藤丸篤夫 (2014)	文一総合出版	膜翅目昆虫の入門書。写真や図の解説も多く、さまざまなハチについて知ることができる(井)
日本産有剣ハチ類図鑑	中村雅雄 (2016)	東海大出版	これまでの分類学的成果を踏まえて日本に産する全種を収録。鮮明な写真と丁寧な解説と検索表により容易に同定可能(山)
きらいになれない害虫図鑑	有吉立 (2018)	幻冬舎	普通的美術系の女性がひょんな事から地元の殺虫剤メーカーに就職し、害虫の飼育を担当する羽目に…。素人目線が実は鋭い、と言うことに感心させられる(土)
蜂刺されの予防と治療 (改訂版)	松浦誠、大滝倫子、佐々真爾ほか (2005)	林業・木材製造業労働災害防止協会	刺す蜂の種類・生態・駆除、蜂刺され対策と医療に関する総合テキスト(佐)
蜂・ダニ刺されの予防と対策	林業・木材製造業労働災害防止協会 (2013)	林業・木材製造業労働災害防止協会	蜂・ダニ刺されの予防と対策の要点をイラストとともに簡易に解説(佐)
蜂と蟻に刺されてみたー痛さからわかった毒針昆虫のヒミツ	ジャスティン・シュミット (2018)	白揚社	ほとんどマッドサイエンティスト!世界中のハチ、アリに自らを刺させて痛みを指数化。イグ・ノーベル賞を獲得したが、検証されることはあるのだろうか?(牧)
人を襲うハチ－4482 件の事例からの報告	小川原辰雄 (2019)	山と溪谷社	長野県の地域医療に貢献した内科医が、39 年間に診察した症例にもとづき、ハチ刺し症の実態と臨床統計のほか、ハチ刺されの予防法や応急処置法、刺すハチの種類や生態などについても紹介(佐)
虫こぶ入門	薄葉 重 (2007)	八坂書房	"実のようだが実ではない?"植物観察時の疑問に答え、ハチの全く別の一面が分かる(井)
花と昆虫のしたたかで素敵な関係－受粉にまつわる生態学	石井博 (2020)	ベレ出版	花と昆虫(ハチ等)をめぐる最新の研究成果を分かりやすく紹介(佐)
昆虫と花	フリードリッヒ・G. バルト (1997)	八坂書房	花と昆虫の共生と共進化が分かる一冊(後)
蜂からみた花の世界	佐々木正己 (2010)	海游舎	養蜂家必携!蜜源植物のバイブル(溝)
ハチはなぜ大量死したのか	ローワン・ジャコブセン (2009)	文藝春秋	2000 年代に入り欧米を中心に発生した CCD(ミツバチ群崩壊症候群)のなぞに迫ったベストセラー。ノンフィクションでありながらスリルのある書ぶりで読むものをミツバチ介して環境問題へといざなう。2009 年から現在においても続く日本国内でも起きているミツバチ不足に改めてフォーカスして欲しい(光)
パワーエコロジー	佐藤宏明、村上貴弘 共編 (2013)	海游舎	パワーエコロジーなんて言葉は世の中に存在しないのだが、東正剛という特異なアリ学者の魅力に惹かれて世界中に飛び散った研究者の卵達の研究誌。生態学、特にフィールドワークをを目指す人にお勧め(牧)
ハチとフィールドと	坂上昭一 (2005)	思索社	ご自身のフィールドでの活動を紹介。南米のみならず、アジア諸国でのハナバチの研究成果を載せるとともに、諸国の当時の文化についても知ることができる、貴重な本。ハチのことに関心がなくても、十分に読む価値があると感じる(工)
蜂の群れに人間を見た男 坂上昭一の世界	本田皖 (2001)	NHK 出版	坂上昭一先生のハナバチ、特にミツバチの生態の研究、時代背景や学生他との関わりも交えて人間模様を鋭く紹介。南米で多様に適応放散を遂げたハリナシバチの記述は、日本の読者には新鮮味がある。小説風の書き方も相まって一心不乱に読み進められる(工)



足下からの共存を

全国地蜂連合会

ハチ軍／書名	著者（発行年）	出版社	推薦者コメント／（井）井上治彦、（い）井上真紀、（工）工藤起来、（後）後北峰之、（坂）坂本昇、（賀）佐賀達矢、（佐）佐山勝彦、（土）土田浩治、（野）野中健一、（牧）牧野俊一、（松）松本吏樹郎、（溝）溝田浩二、（光）光畑雅宏、（山）山根爽一
ファーブル昆虫記	奥本大三郎 訳 (2005)	集英社版	ハチの話は随所に出てくるがたとえば第1巻(牧)
楽しき挑戦：型破り生態学 50 年	伊藤嘉昭 (2003)	海游舎	伊藤嘉昭という世界の研究者からも一目置かれた生態学者の自伝。強烈な個性がにじみ出ており、読んでいて楽しい(土)
昆虫学五十年（あるナチュラリストの回想）	岩田久二雄 (1976)	中央公論社	自然からの逸脱が目立つわれわれの日常生活の傍ら、ハチたちのいきいきとした生きざまを自身の回想とともに克明に記述(佐)
私のブラジルとそのハチたち	坂上昭一 (1975)	思索社	1960年代ブラジル滞在時の多様に進化したハリナシバチの比較生態研究の紹介。当時のブラジルの文化や人々の考え方も紹介。ブラジル人の老いた教授たちは本書を日本語ながら研究室に置いていた。ただし、日本語のため本の上下がわからないようで、時々逆さに置かれていたため、微笑ましく思い上下を(私が)正した(工)
自然観察者の手記（1-4）	岩田久二雄 (1980-1981)	朝日選書	圧倒的な観察記録をもとに、狩リバチの興味深い生活を描き出している。かつての自然環境についても知ることができる(松)
民族昆虫学－昆虫食の自然誌	野中健一 (2005)	東京大学出版会	虫食を通じて人間の営みもナチュラルヒストリーに位置づけ。スズメバチ食文化研究の体系化と実証も。アリ食もあり(野)
昆虫食先進国ニッポン	野中健一 (2008)	亜紀書房	日本の蜂の子食の歴史をフィールドワークや文献資料からひもとく(野) 
虫はごちそう	野中健一 (2009)	小峰書店	蜂の子もアリ食も、文化に生きる人々をこどもにも親しみやすく(野) 
スズメバチ類の比較行動学	松浦誠、山根正気 (1984)	北海道大学図書刊行会	スズメバチ研究のバイブル、100年に1冊の名著(佐)
スズメバチはなぜ刺すか	松浦誠 (1988)	北海道大学図書刊行会	スズメバチと人間とのさまざまななかかわりについて、分かりやすく解説(佐)
スズメバチの科学	小野正人 (1997)	海游舎	カラー図版と解説の2部構成、著者の専門である化学生態学的知見を分かりやすく解説(佐)
スズメバチー都会進出と生き残り戦略	中村雅雄 (2012)	八坂書店	在野研究者によるスズメバチ博物誌。キロスズメバチの複女王巣といった数々の新知見を、都市部を主とした観察で明らかにしてゆく。アマチュアならではの悩みや喜びも含め、プロをものゝく情熱に敬服(牧)
世の中への扉 おどろきのスズメバチ	中村雅雄 (2013)	講談社	スズメバチとはどのようなハチか、その生活史、行動、人との関わりなどを平易に解説(山)
スズメバチの真実：最強のハチとの共生をめざして	中村雅雄 (2018)	八坂書房	川崎市小学校教員を務めながらスズメバチの生態を研究。日本のスズメバチの生態やそれとの付き合い方の他、マレーシアや中国などアジアの多様なスズメバチについても見事な写真と共に解説。近年、日本にも侵入したツマアカスズメバチについても実地調査を踏まえて生態や問題点を詳解(山)
都市のスズメバチ	山内博美 (2009)	中日出版社	元名古屋市生活衛生センター職員による現場で得られた25年の駆除データを駆使した、都市環境下におけるスズメバチの生態を紹介(佐)
図解とマンガでわかる最凶生物 超危険!スズメバチLIFE	丸沢丸 (2019)	講談社	スリルとワクワク・ドキドキを自らの体験から活写。スズメバチが愛おしくなる!(野)
スガレ追ひ	井伏鱒二 (1977)	筑摩書房	クロスズメバチ文学の傑作。生態、捕り方・飼い方が丁寧に描写されている。スガレは信州地方での方言(野)
ヘボ(地蜂)騒動記ーその生態と魅せられた人々	西尾亮平 (1999)	丸理印刷株式会社	ヘボ(クロスズメバチ)の生態を地道に観察し、女王越冬の普及を説き、地域振興に結びつけた(野)
だからへぼはやめられない!	安藤啓治 (2009)	風媒社	地域でヘボ捕り・飼育に没頭し、人生を存分に楽しむ様子が詳細に綴られている(野)
高杉さん家のおべんとう3	柳原望 (2011)	メディアファクトリー	ヘボの聖地、岐阜県中原のヘボ祭りを舞台に物語が繰り広げられる。蜂の子飯のレシピとエピソードも。他巻では養蜂も重要な役回り(野)
里山にすむクロスズメバチ／虫から環境を考える5	高嶋清明、海野和夫 (2005)	偕成社	人とクロスズメバチの深いむすびつきをプロの写真家が紹介(井) 昆虫写真家、高嶋さんによる生態写真、とくに飛翔写真がすごい。長野の愛好家小林さんが追求するこだわりの飼育の様子も必見(坂)
スズメバチを食べるー昆虫食文化を訪ねて	松浦誠 (2002)	北海道大学図書刊行会	スズメバチに生涯を捧げた唯一無二の研究者が世界を回るなかで食習慣も丹念に解明。日本をはじめ中国など各地のハチ食文化が詳しく紹介され必見(坂)
季節のごちそうハチごはん	横塚真己人 (2018)	ほるぷ出版	ヘボと呼ばれるクロスズメバチを採り、飼い、食べる人々。食べるだけでは終わらない、楽しむ笑顔と家族の団らん、子どもたちの目目が印象的な本(坂)
蜂になった男	富永朝和 (2000)	信濃毎日新聞社	無数に襲いかかるキロスズメバチを巧みに操り、100個以上の巣を合体して六畳間ほどもある世界最大の巣を作り上げた男の痛さと愛に満ちた奮闘記。巣融合のアイデアと忍耐に脱帽(牧)
チピアシナガバチの社会	岩橋統、山根爽一 (1989)	東海大学出版会	自らのデータをもとに、狩リバチの真社会性進化に関する伊藤嘉昭氏の仮説にあえて反論を挑んだ論争の書(牧)
[図説] 社会性カリバチの生態と進化	松浦誠 (1995)	北海道大学図書刊行会	研究者でも目にすることが難しい、すばらしい写真の数々(佐)／スズメバチ研究の第一人者が、社会性狩リ蜂類の生活や行動、進化について分かりやすく解説(山)
寄生バチと狩リバチの不思議な世界	前藤薫 編 (2020)	一色出版	ハチの研究者たちが紹介する驚きのハチの世界。興味深い行動の動画へのリンクがある(松)
日本の昆虫3：フタモンアシナガバチ	山根爽一 (1985)	文一総合出版	フタモンアシナガバチとはどのようなハチか、営巣場所と巣の形態、生活史、社会行動、観察の仕方などを平易に解説(山)
フタモンアシナガバチ	山根爽一 (1986)	文一総合出版	小著ながらフタモンアシナガバチのすべてを1冊にまとめた名著(佐)
アシナガバチー億年のドラマーカリバチの社会はいかに進化したか	山根爽一 (2001)	北海道大学図書刊行会	カリバチの社会進化の道筋を独居性ハチ類の子育ての進化から分かりやすく説く。真社会性の入り口に位置づけられるハラボソバチの社会システムを詳解(山)／カリバチの社会・行動の“なぜ”が解けることでしょう(賀)
自然の観察事典 32：アシナガバチ観察事典	小田英智(文)、小川 宏(写真) (2005)	偕成社	小田英智氏は子供向け科学雑誌の編集者や科学解説者として活躍。小川宏氏は著名な昆虫写真家で、2人がアシナガバチの巣作りから女王と働き蜂の共同生活、新しい女王とオスの誕生と交尾、新女王の越冬など、1年の生活の流れを多数の写真と平易な文章で解説している。写真はどれも大変美しく、蜂の行動や巣の作りなどを見事に表現している。小さな読者にとっても十分理解でき、かつ興味をそそる内容であり、これに触発されて未来の学者が育つことを期待したい(山)
狩蜂生態図鑑	田中義弘 (2012)	全国農村教育協会	様々な狩蜂の暮らしを紹介。狩りの決定的瞬間を捉えた生態写真が圧巻(松)／狩蜂の生態を、ハンターとしての決定的瞬間をとらえた多数の写真で解説(井)
ベッコウ蜂	牧野信一(初出1933)	全集所収(Kindoll版)	酒浸りの自堕落な生活のなかで出会ったベッコウバチとクモとの闘い。カメラ片手にくんずばぐれつの両者をどこまでも追いかける結末やいかに(牧)
カリバチ観察事典／自然の観察事典 5	小田英智、小川 宏 (1996)	偕成社	ジガバチ、ドロバチなど一般に馴染みのない蜂たちの魅力を質の高い生態写真で教えてくれる(坂)
日本産全種生態：アシナガバチ	田淵行男 (1988)	講談社	長野県の安曇野で著者が生涯をかけて観察したアシナガバチの生態を、豊富な写真をもとに解説。著者の観察眼と自然への愛に圧倒される(山)
おいかけてこの生態学ーキスベッコウと草むらのオニグモたち	遠藤知二 (月刊たくさんのふしぎ364号／2015)	福音館書店	野外の草むらで繰り広げられる、食う食われるの関係を観察者の視点からデータとともに分かりやすく解説した絵本(佐)
すれちがいの生態学ーキオビベッコウと小道の虫たち	遠藤知二 (月刊たくさんのふしぎ388号／2017)	福音館書店	虫たちの出会いをめぐる3部作の完結編。クモを狩るハチの野外生態劇を観察者の視点からデータとともに分かりやすく解説した絵本(佐)
独居から不平等へーツヤハナバチとその仲間の生活	坂上昭一、前田泰生 (1986)	東海大学出版会	ハナバチの真社会性進化を、ツヤハナバチの室内飼育で再現する意欲的な試みの記録(牧)
マルハナバチを使いこなすーより元気に長く働いてもらうコツー	光畑雅宏 (2018)	農文協	マルハナバチへの愛が詰まった世界初のマルハナバチの農業利用における実用書。マルハナバチの生態をわかりやすく説明しつつ、利用方法を科学的な知見に基づき解説。外来種ゆへの環境問題についても触れており、マルハナバチの基礎と応用の両面を知ることができる(光)
まるはなばちのレオン	A.クリングス (2002)	岩波書店	日本ではなじみの少ないハチ、マルハナバチを知るきっかけになる絵本。丸っこく毛むくじらのマルハナバチのふもふふした感じをかわしらしく表現した絵が親近感を持たせる(光)
マルハナバチ 愛嬌者の知られざる生態	片山栄助 (2007)	北海道大学出版	日本では欧米とことなり、マルハナバチに関する書籍が少ないなかで、この一冊があればマルハナバチの営巣、育児習性について網羅される一冊。長年にわたりマルハナバチの巣を観察しつづけてきた筆者ならではの(光)マルハナバチの知られざる巣内の様子について多くの写真とともに詳しく解説。筆者のマルハナバチへの愛を感じる。写真と詳しい解説あり(い)
Bumblebees	D.V. Alford (1975)	Davis-Poynter	全ての始まり(い)
マルハナバチの経済学	ベルンド・ハインリッチ (1991)	文一総合出版	バイブルです(い)
日本産ハナバチ図鑑	多田内修・村尾竜起編 (2014)	文一総合出版	種ごとに詳しい形態写真を付して日本産ハナバチ類の全貌を示した最初の図鑑(佐)
日本産マルハナバチ図鑑	木野田君公、高見澤今朝雄、伊藤誠夫 共著 (2013)	北海道大学出版会	豊富なカラー写真を用いて、マルハナバチの進化、分類、生態を解説するとともに、巣の発見法や飼育法などについても掲載(佐)マルハナバチのことを知らうと思ったらこの本。見分け方の解説も充実している(松)
Form and Function in the Honey Bee	Lesley Goodman (2003)	IBRA	体毛1本にも役割があり意味がある(後)
蜜蜂の生活	モリス・メーテルリンク (2001)	工作舎	「青い鳥」で有名なメーテルリンクがミツバチを飼いながら洞察した「巣の精神」とは？ノーベル賞作家による哲学的博物誌(牧)
ミツバチの世界	坂上昭一 (1983)	岩波書店	日本のファーブルが、ミツバチ社会から人類の未来へと思いを馳せた名著(溝)
ミツバチのたどったみち	坂上昭一 (2005)	思索社	ミツバチを頂点とするハナバチ類の社会進化の全体像をみごとにまとめている(井)
ミツバチの世界	ユルゲン・タウツ (2017)	丸善株式会社	発熱バチの存在や巣板を通信網として活用(後)
ミツバチの生態学	トーマス・D・シーリー (1989)	文一総合出版	なにげないミツバチの行動を研究者の工夫に満ちた実験により意味あるものに導いていく。その過程にワクワクする(後)
ミツバチの知恵	トーマス・D・シーリー (1998)	青土社	社会性昆虫の頂点に立つミツバチのコロニーは、調和のとれたひとつの生きもの(超個体)だ!(溝)
ミツバチの会議	トーマス・D・シーリー (2013)	築地書館	大きくなった巣から古い女王が働き蜂を連れて引っ越しをする分蜂。その際の意思決定方法に注目した本で、人間社会へのヒントも述べられている(坂)
野生ミツバチとの遊び方	トーマス・D・シーリー (2016)	築地書館	ミツバチ研究の世界的権威が、「ヘボ追いならぬ「ミツバチ追い」の醍醐味を語り尽くす(溝)
羽音に聴く 蜜蜂と人間の物語	芥川仁 (2020)	共和国	日本各地の養蜂に生きる人々のくらしを優しく切り取ったフォトエッセイ(溝)
ミツバチの文学誌	渡辺孝 (1997)	筑摩書房	ミツバチほど人間社会と比較された昆虫はいない。古今東西の文学から涉猟したいわば「擬人化の博物誌」(牧)
写録二ホンミツバチ	藤井英美 (2019)	新樹社	プロのカメラマンが野生の二ホンミツバチの生態を激写!(溝)
二ホンミツバチ	佐々木正己 (1999)	海游舎	外来種セイヨウミツバチが席卷してきたなかで見直されつつある二ホンミツバチ。発行はやや古めだが、この在来ミツバチについて科学的知識を得る最初の本としてお勧めできる小百科。研究者ならではの素晴らしい写真も多数(牧)
採蜜革命 あなたの重箱式巣箱にも	宮崎寛 (2019)	熊日出版	話題のフローハイブで二ホンミツバチを飼育するためのマニュアル(溝)
蜜量倍増ミツバチの飼い方	干場英弘 (2020)	農文協	養蜂の基礎についてミツバチの生態とセットで分かりやすく解説(溝)
養蜂大全	松本文男 (2019)	誠文堂新光社	養蜂に関する“すべて”を豊富なカラー写真でマニアックに解説(溝)
庭で飼うはじめてのみつばち	中村純、和田依子 (2008)	山と溪谷社	はちみつの魅力、ミツバチ飼育の魅力にあふれ、飼ってみたくなってしまう本(坂)
ミツバチと暮らす	藤原誠太 (2017)	地球丸	ミツバチ飼育の入門書。庭で飼うーに比べて実践的な内容が盛りだくさん(坂)
みつばちマーヤの冒険	フルデマル・ボンゼルス (1996)	小学館	昆虫や植物を細密に描く熊田千佳慕さんの絵がすばらしく、いつまでも眺めてしまう(坂)
ジガ蜂	島木健作 (1970)	新潮社 (新潮文庫赤装所収)	病室の節穴に去来するハチ達の営みに、生への意志を託す日本的身辺雑記エッセイの一典型(牧)
天空の蜂	東野圭吾 (1998)	講談社文庫	爆弾が満載された大型特殊ヘリが「天空の蜂」と名乗る犯人強奪される。標的は原子力発電所。日本国民すべてを人質にした緊迫感あふれるサスペンス(い)
風の中のマリア	百田尚樹 (2011)	講談社文庫	みつばちマーヤの冒険のスズメバチ版?働きバチの学術的な生態も盛り込む冒険小説(佐)
雀蜂	貴志祐介 (2013)	角川書店	スズメバチをモチーフにしたホラー、最後のどんでん返しは予測不能(佐)
覆面作家の夢の家	北村薫 (2019)	角川文庫	ミステリー小説。なんと!マルハナバチが殺人に使用される(い)
蜂に魅かれた容疑者ー警視庁いきもの係	大倉崇裕 (2017)	講談社文庫	捜査の最前線から離れた警部補と獣医師免許をもつ女性巡査の迷コンビが、蜂を凶器にした事件に立ち向かう。二人のコミカルなやりとりが楽しい。行きつけの喫茶店で蜂の本を読んでいたら、横にいた女性が気味悪がって席を移る、というエピソードもあり(佐)
昆虫法医学捜査官	川瀬七緒 (2014)	講談社文庫	昆虫法医学とは、遺体に湧くウジや虫を用いた死後経過時間の割り出し、虫を介したDNA鑑定などに関わる。ウジだけでなく、クロスズメバチが犯人解明への重要なカギとなる(い)
銃・病原菌・鉄 (上) (下)	ジャレド・ダイヤモンド (2000)	草思社	ハチがどのように社会性を進化させてきたのか、に興味があった私がヒトの社会性の進化(発展)にも興味をもつきっかけになった本(賀)

